

タイにおける情報リテラシー教育の現状と課題

加納 寛子^{*1}

＜概要＞タイの学校教育における情報機器環境の現状は、1人1台タブレットを配布する取り組みを開始されており、すべての学校でWiFi敷設が順次進められている状況である。また、情報リテラシー教育に関しては、情報機器の操作や情報システム、プログラミングなどの結果が出やすく職業に結びつきやすいスキル教育に重点が置かれていることがわかった。

＜キーワード＞情報、情報リテラシー教育、タイ

1. はじめに

本稿では、タイの学校教育における情報機器環境と情報リテラシー教育の現状と課題について報告する。

2. タイの教育制度について

タイの学校教育制度は基礎教育と高等教育で構成される。基礎教育は、初等教育（第1～6学年）、前期中等教育（第7～9学年）、後期中等教育（第10～12学年）の3つの教育段階で提供される12年間の教育を指す。後期中等教育段階で生徒は普通教育と職業教育を選択し、この時点で専門教育が始まる。普通教育を受ける生徒は学術機関でのさらなる学習に備え、職業教育を受ける生徒は労働市場に参入するための訓練を受ける。職業教育を受けた生徒は職業・技術カレッジに進学し継続的に教育を受ける場合もある¹⁾。

3. タイの学校教育における情報機器環境

タイの政府は、1人1台タブレットを配布する取り組みを開始し、2012年の夏には学校向けに100万台のタブレットを購入し、小学校1年生全員に1人1台配布した。費用は、3,280万ドル（約30億円）であった。タブレットの使用は、配布当時では最新のAndroid OS 4.0を搭載した中国の「ShenZhen Scope Scientific Development」社が開発した「Scopad SP0712」という機種である²⁾。価格は、1台あたり82ドル（訳8千円）で、GPS機能を備えており、7インチスクリーン、8GBのHDD、1GBのメモリ、1.5ghz single-core processorのCPUを持つ。そして、すべての学校でWiFi敷設が順次進められている。

さらに、タイのICT省（Ministry of Information and Communication Technology [MICT]）によれば、インターネットが利用でき

るインフラの整備を、2015年までに人口の80%、2020年までに人口の95%を推進目標として掲げている³⁾。

1人1台タブレットを配布する取り組みは、まだ始まったばかりであるが、WiFi敷設とともに、徐々に紙の教科書から電子教科書中心の教育へと進むであろう。しかしながら、まだ始まったばかりの取り組みであり、小学校1年生から高校3年生まで全員が一人1台所有するようになるには、あと10年はかかることが見込まれる。実際、2013年2月にタイ国スラタニにある小中学校を訪れた際には、小・中学校ともに、コンピュータ室でコンピュータを用いた授業を実施していた。図1上はペイントを用いたデジタル表現の小学校での授業風景である。図1下はコンピュータを用いた総合的な学習の時間のはじめに、筆者が簡単な自己紹介をしている授業風景である。



図1 コンピュータを用いた授業風景
(上は小学校、下は中学校)

4. タイの情報リテラシー教育

加納ら(2013)は「情報リテラシー」を「情報的な見方考え方を身につけ、現象や事象等を適切に解釈し意味を付与し、分析し、判断し、表現および伝達する能力」と定義し⁴⁾、テキストマイニングとデベロプメンタル・ディスカッションによる手法を用い、「情報通信技術」「情報システム」「問題解決」「情報分析」「情報モラル」「情報の歴史」「情報機器の操作」の7つの分野に分類した(加納ら, 2014)⁵⁾。この分類にそって、タイの情報リテラシー教育の実施状況を表1にまとめた。タイには情報リテラシーという教科はなく、「コンピュータ」と「職業と技術 (Learning Area of Occupations and Technology)」という科目の中に、情報リテラシーに該当する内容が含まれている。

表1 タイの情報リテラシー教育の実施状況

情報リテラシー7分野	タイのカリキュラムにおける実施状況
情報通信技術	あり(前期及び後期中等教育)
情報システム	あり(前期及び後期中等教育)
問題解決	なし
情報分析	なし
情報モラル	あり(初等教育)
情報機器の操作	あり(初等教育及び前期中等教育)
情報の歴史	あり(前期中等教育)

初等教育(第1～6学年)では、「コンピュータ」という科目が設けられており、必修単位として1単位で、年間40時間学ぶことになっている。低学年では、ペイントで絵を描いたり、プレゼンテーションソフトに画像を貼り付けたり、短い文字を入力したりするなど、デジタル表現を中心に学ぶ内容である。中学年以降では、ワープロソフトに文字を入力し、デザインを変えたり、表計算ソフトに数値を入力し、グラフを描いたり、プレゼンテーションソフトで動きのあるプレゼンの作成などを行っている。操作を学ぶ過程で、著作権や肖像権、ネットの過剰利用による健康への影響など情報モラルに相当する内容も学ぶ。

また、前期中等教育(第7～9学年)においても、「コンピュータ」という科目が設けられており、必修単位として1単位で、年間40時間学ぶことになっている。生徒自身がメディアの制作者となり、オリジナルビデオの制作など、少し高度なデジタル表現について学んでいる。さらに、前期中等教育では、「プログラミング」という科目を、必修単位として2単位で、年間80時間学ぶことになっている。従って、プログラミングの授業は、前期中等教育3年間で、必修科目として240時間学ぶカリキュラムであるため、すべての生徒が義務教育を終えるまでに

一定レベルのプログラミングの技能を身につけられるようになっている。

後期中等教育(第10～12学年)においては、「職業と技術」という科目が設けられており、必修科目や総時間数に関しては、学校ごとに定められている。

5. まとめと今後の課題

タイの学校教育における情報機器環境の現状は、1人1台タブレットを配布する取り組みを開始しており、すべての学校でWiFi敷設が順次進められている状況である。また、情報リテラシー教育に関しては、情報機器の操作や情報システム、プログラミングなどの結果が出やすく職業に結びつきやすいスキル教育に重点が置かれていることがわかった。問題解決能力や情報分析力など、スキル以外の内容に重点が置かれていないことが、今後どう影響を及ぼすか、長期的スパンで調査をしていくことが今後の課題である。

[参考]

- 1) 独立行政法人 国立青少年教育振興機構, 青少年教育関係資料, タイ王国
- 2) Jon Russell, Thailand signs \$32.8m deal to begin largest educational tablet rollout to date, TNW, 2012.
- 3) Ministry of Information and Communication Technology, <http://www.mict.go.th/view/10/home>
- 4) 加納 寛子, 菱田 隆彰, 長谷川 元洋, 古崎 晃司: 文部科学省検定教科書 高等学校「情報」の用語分析, 科学教育学会第37回年会論文集, Pp.152-155, 2013.
- 5) 加納 寛子, 菱田 隆彰, 長谷川 元洋, 古崎 晃司: 情報リテラシー(情報分析分野)に関するオントロジーの構築, 科学教育学会第38回年会論文集, (印刷中), 2014.
- 6) The Ministry of Education Thailand, The Basic Education Core Curriculum, Learning Area of Occupations and Technology, 2008.

[謝辞]

学校訪問にあたっては、立命館大学教育開発推進機構の林徳治先生及びGreen Group Agency Co., LtdのMs.Orapinらのご協力に感謝を致します。

本研究は科研基盤(B)25282031(代表者: 加納寛子)の助成を受けて行った。